黒部川・餓鬼谷

遊行日：03・10・11～13

メンバー：松田（し）、吉田、三井（記録）

今回の山行は元々、今年の夏休みに行われるはずだった。それが今夏、雨続きのため増水の危惧から転進を余儀なくされ（転進した「櫛戸川」はそれはそれで面白い充実した沢だったが。）、来期に持ち越される事となった。

それが黒部に執念を燃やす松田さんの強い意思で、沢のシーズンも終わろうとするこの時期に急遽実行する事となった。

前夜、甲府で松田さん達と落ち合い、吉田車に乗り込む。車は順調に走り、安房トンネルをくぐり、宇奈月の大駐車場に到着したのは深夜3時だった。後部シートを動かしてスペースを作ると軽く入山祝いをし、そのまま仮眠。

「一日目」

朝一番のトロッコ電車に乗り込み、大勢の観光客と共に樺平に向かう。車窓（じゃない）。トロッコ電車は剥き出しの車両だ。（から見ると対岸の山裾はまだ殆んど紅葉は見られない。）この時期としては遅いように見える。季節がズレてきているのだろうか。）

一時間二十分程揺られると終点の宇奈月。

ここから水平歩道を歩くのだが水平歩道と言ったって初っ端は胸を突くような急登を強いられる。

十分ほどで漸く文字通りの水平道になり、ノンビリとハイカー気分ではあるが、餓鬼谷合流点の標識の地点に出、傾斜の緩

3時間ほどで、「餓鬼谷合流点」の標識の地点に出、傾斜の緩そつな所を選ん下降する。途中から灌木にぶら下がりがらの下降になり、懸垂で漸く黒部川の河原に降り立つ。

身支度をして対岸に渡るが山行前に一番心配の種だった本流の渡渉は水量も少なく拍子抜けする程だ。

対岸に流入しているのが目的の「餓鬼谷」。出合に15mのスラブ滝が懸っている。水流の右から登り、直上して灌木帯をトラバースして落口に抜ける。

巨岩のゴロゴロした河原をすぎるとゴルジュになり、右岸から巻いていく。20mの大滝を巻くつとしていると対岸に何やら動くものが。『熊！』ここは持参の「トボ」では左岸を巻くようになっている、その通りにしていたら熊と鉢合わせしていたかもしれない。もしそうなら…。

松田さんの話では今年、某会のベテランが滝を巻いて転落して大怪我をしたが、それが熊に襲われた為に落ちたらしい、との事。全く沢は何が起きるか分からない。危険が一杯だ。

再び河原状となり、しばらく行くと河原のあちこちから湯煙が立ちのぼっている。「餓鬼の湯」と呼ばれている辺りだ。不思議な光景だ。また入渓して大して進んではいけないのだが時間も頃合だし、小広くなった河原で流木も辺りに豊富にあ

る。「マー、いいか。」で、本日はここまで。

ツェルトを張り、焚き火の支度をしている間、松田さんは対岸の河原を掘って風呂作りに懸命になっている。

沢が夕闇に包まれ、焚き火が明々と燃え、安穩なひと時を迎えようとした頃、上気した顔で松田さんが戻ってきた。

「風呂に入ってきましたよ。」でも、中々上手くいかなくて……。熱いお湯と冷たい沢の水が上手く混ざらないので快適とは言いがたかったようだ。

それはそれ、楽しい思い出をまた一つ創って沢の夜は更けていく。

「第二日」

昨日は予想外にはかどらなかつた。今日は頑張らないと……。

河原状を行くと両岸が岩棚状になる。以前行つた何処かの觀光地の「溪谷」つてのにこんな感じのがあつたなあ。

沢が左折した所に3段の滝がかかつており、それを左から越えるとゴルジュになる。中に登れない1.5mほどの滝があり、それを右岸から巻くが沢床に下りようとするとその先にも同じ様な滝があり更に巻いたところで沢床に下りる。

再び小広くなつた河原が続く。8mの滝を左岸から越えると大きなS Bの御出まし。末端まで恐る恐る進み、S Bの端に転がっている太い倒木にロープを廻して懸垂する。頭上にはしかかるようなS Bを見上げながらの懸垂は余り気分のいいものじゃない。

更に数箇所S Bが懸つているが殆んどくぐつて通過する。一たん穏やかな溪相となるが間もなく「トボ」に3段1.5mの表示の滝に行く手を遮られる。右手の凹角の壁から登れそうに松田さんが空身で取り付く。

下半分は問題なかつたが上半分はスプーンですくつた様なラッペになつていて苦戦している。ハーケンを2本打ち何とか登りきる。僕が後に続いたがそのランペの所がやはり嫌らしい。僕はすべりそうな所は嫌いなのだ。あつさり、根性なくゴボウで登る。取り付きは2段に見えたのだがその上は水流が岩の穴をくぐるように落ちていて3段の滝になっていることがわかる。珍しい形状だ。

先の谷は雪深に埋まつている。しかし、その雪深が切れたところに大きな連瀑が落ちていて。「恵比寿の滝」だろうか。勿論、登れるハズもなく右岸の巻きに入る。絡み合つたスラタケを漕いで滝上に下りると穏やかな河原となつている。対岸に目をやると10m程上の斜面に直径2・3mくらいだろうか、大きな穴が開いていて、それが横に並んで何個も開いている。足元の河原には錆びた大きな鉄製の歯車が転がつたりしている。「大黒銅山跡」である。

平瀬の穏やかな沢を10分程進み右岸の高台に上がるとそこが唐松岳から下つてきている登山道に行く踏跡がある所だつた。何とか予定通りに進む事が出来た。

雨が降り出し、慌ててツェルトを張り、中にもぐり込む。ここまで来れば心配する事は何も無い。天気はともかく気分は

極めて良好だ。

「第三日」

昨日の夜から雨はしつかり降っている。

今日は下るだけ。ゆつくり支度を済ませ、カッパに身を包んで出発。しかし、「下るだけ」と言いながら歩きだすと、登山道はひたすら登っている。ガスで視界の全く無い中を萎える気力を奮い立たせながらトボトボと歩く。

一時間半ほどの登行で漸く「餓鬼山」。何の展望も得られないピークで記念写真を一枚撮るとそそくさと下山。これからは文字通りの下り道なのだが道はかなりの急坂で、しかも昨日からの雨の為ぬかるんでいて下り難い。滑ったらドロドロになるだけではなく登山道から転落しそうで嫌らしい。道の両側の木立や、フィックスされているロープにつかまったりしながら下って行く。

三時間ほどで漸く「祖母谷温泉」に下り着き、観光客に混じって更に三十分ほど林道を歩くと出発地の「櫛平」に到着。

我々の到着を待っていたかのような電車で急かされ、乗り込んだものの全身濡れそぼった身体に冷たい雨と風の吹きさらす電車は正に耐寒訓練の辛々。

三日ぶりに宇奈月に戻り、大慌てで乾いた服に着替えて漸く人心地がつく。「サア、後は家に帰るだけだぞ。」